

衣服と環境温度にかかわる快適性（第4報） 温熱的快適性を得るための
着衣量を支配する個人要因

大阪教育大 ○奥窪朝子

山口大医・公衛 酒井恒美

目的 本報では、前報において考案した標準化着衣量（SDC）に関し、その変動にはどのような個人要因が寄与しているかを追求した。さらに、薄着を実践するための着衣態度は、どのような要因に支配されているかを検討した。

方法 対象者および解析に供した有効サンプル数は、前報におけると同様である。標準化着衣量（SDC）についての解析（数量化理論第1類）には、要因として着衣態度、衣服の快適因子（既報で明らかにした4因子）および生活態度など、成人では9アイテム、学童では11アイテムを取り上げた。薄着を心がけているか否かの着衣態度についての解析（数量化理論第2類）には、5カテゴリーを外的基準とし、要因としてかぜり患回数、薄着の効用とその励行についての情報ソースなど、成人・学童とも10アイテムを取り上げた。

結果 1)着衣量への寄与の大きい個人要因は、成人：①着衣態度、②衣服の温かさを求める度合、③活動性を求める度合、④スポーツ、⑤こたつに入る習慣、学童：①着衣態度②こたつに入る習慣、③スポーツ、④衣服の温かさを求める度合、⑤着衣の自主性などであった。成人・学童ともに、着衣態度が最も大きい寄与要因であったことは注目ししよう。2)その着衣態度を支配するおもな要因は、成人：①かぜり患回数、②活動性を求める度合、③年齢、④スポーツ、⑤乾布まさつの励行、学童：①だれに教えられたか、②活動性を求める度合、③かぜり患回数、④衣服の温かさを求める度合、⑤こたつに入る習慣などであった。得られた成績は、薄着の習慣を身につけるための努力目標として、教育上示唆に富むものと考え。薄着の効用については別報にゆずる。